

# 地域でつながり、 「普通に一緒に」働く工場

— 株式会社マルハ物産 (徳島県) —

職場  
ルポ

人口1万5千人ほどの町に、障害者雇用率17%超の食品加工工場がある。  
30年以上前から続く地域のつながりが、ともに働く企業風土もはぐくんでいる。



(文) 豊浦美紀 (写真) 官野貴



取材先データ

株式会社マルハ物産

〒771-0218 徳島県板野郡松茂町住吉4-3  
TEL 088-699-2345 FAX 088-699-2757

Keyword: 知的障害、就労移行支援、製造ライン、資格取得

## POINT

- 1 その人の適性に合わせ、各製造ラインに障害のある従業員を配置
- 2 経験によって資格取得をうながし、組織全体の底上げへ
- 3 地元の知的障害者施設と連携し、業務委託も行う



管理部部长と工場長を兼務する大鋸史郎さん

### 障害者雇用率17%超の 食品加工工場

レンコン生産量が茨城県に次いで全国2位の徳島県。ここにレンコン加工業界で国内最大手といわれる「株式会社マルハ物産」がある。創業は1958（昭和33）年で、1964年から松茂町で操業している。工場と事業所は徳島県・茨城県のほか中国にもあり、レンコン取扱量は年間計6千t以上にのぼるといふ。キノコ・サツマイモ・タケノコ・ゴボウなどの農産物も含めた加工食品（水煮・酢漬け・味つけ・冷凍など）700種以上を業務用や市販用に製造している。

本社工場は、徳島阿波おどり空港から車で約7分。従業員59人のうち、知的障害のある男性従業員10人が在籍している。障害者雇用率は17・22%（2019年3月末時点）と、非常に高い。障害の程度

は軽度から重度まで、年齢も20〜50代と幅広い。

具体的な仕事内容は、加工品の原料となる農産物の洗浄・選別をはじめ、加工品の袋詰め・梱包や機械洗浄など、多岐にわたる。

管理部部长で工場長もつとめる大鋸史郎さんは「障害のある従業員は各製造ラインにまんべんなく配属され、ほかの従業員と一緒に業務を行っています。人員的にも作業内容的にも、なくてはならない存在です」と話す。

### 30年以上前から 施設とつながり

マルハ物産では、30年以上前の1980年代から知的障害者を実習生として受け入れてきた経緯がある。工場がある松茂町内に1958年に開所した障害者支援施設「吉野川育成園」（以下、「育成園」）から依頼を受けたのが始まりだという。

「特にレンコン加工は、秋から春先にかけての繁忙期にはどうしても人手不足になるため、皮むき作業などを近所の人たちに手伝ってもらっていました。気軽に『ちょっと来てや』と声をかけ合う近所づきあいのなかで、育成園ともつながっていったようです」と大鋸さん。

しっかりとした雇用記録が残っているのは約30年前からだそうだが、職場実習を続けるなかで、一定程度の適性と意欲



のある人が雇用契約に結びついていった。工場の製造ラインは共同で取り組む作業が多いため、ほかの従業員に混じって作業をしながら、適性に合わせて少しずつ作業量や時間を増やしていったという。

こうして工場内で障害者が一緒に働く職場環境が徐々につくられ、従業員の入りがあっても自然になじめるような企業風土が受け継がれてきたようだ。

一日あたり約455tの農作物を加工している



選別ラインで活躍している、ベテランの稲葉和彰さん。  
異物除去機の洗浄作業も真剣に行う



「定年までこの会社でがんばりたい」と語る  
稲葉さん

「職場では、障害者のみなさんも当たり前のように一緒にいるので、だれも違和感がないと思います。もちろん時折、業務上の言葉のやり取りのむずかしさが出てくることもあります。特別扱いはず、しっかりと伝え合うことを心がけています」

ちなみに新しく入ってきた社員から「障害のある従業員と、どのように接したらいいか」といった相談を受けると、大鋸さんは「普通の人として、ふだん通りにやり取りしてください。会話での多少の不自由さはあるかもしれませんが、ふだん通りわかりやすく語りかければ大丈夫」と伝えている。その一方で不要なトラブルが生まれないよう、前もってベテラン社員にも一緒に入ってもらいながら見守って

もらう細やかな体制づくりも欠かさない。「現場でうまくいかなくなるとすれば、原因は、お互いの情報・理解不足に尽きると思います。障害のあるなしは、仕事をするうえで壁にはならず、あくまで「役割の違い」であると思えるような職場環境を、いかにつくるかが大切だと思っています」

いまでも育成園の関連施設や特別支援学校などから実習生を受け入れたり、トライアル雇用を経るなどして採用につなげている。基本的にはフルタイムの立ち仕事なので、ある程度の体力・集中力が基本条件だ。もちろん長く勤められるよう、お互いにマッチできるかどうか見極めることも大事だという。

それでも入社直後や繁忙期には、精神的・体力的な疲れなどから私生活に支障が生じることもある。

「朝晩の生活リズムが乱れてくると、施設や通勤寮の職員らから『朝起きにくくなっている』、『トイレがうまくできなくなっている』といった不調を知らせる連絡が入るので、作業負担を減らしたり配置を変えたりして調整しています」

### 各ラインで 適性を活かして活躍

さつそく、工場内を見学させてもらった。学校の給食室を巨大化したようなイメージだ。

ステンレス製の大きな水槽のなかのカット済みのレンコンをザルですくいあげ、隣の大きな機械のなかに投入していたのは稲葉和彰さん（50歳）。1989（平成元）年入社で勤続30年の最古参だ。主に、選別ライン（原料の異物除去・規格選別工程）の原料投入と選別業務を担当している。この日は2人の女性従業員と一緒に作業をしていた。

水槽のなかのレンコンがなくなると、いったん機械を洗浄する。手際よく機械の各部を水洗いしながら、次の原料を投入する準備を始めていた。一日の終了時には設備の分解洗浄、翌日スタート時の部品の組立て作業も行う。大鋸さんによると「機械洗浄では、特に見えにくいところに、原料が詰まっていたり、水垢などがついていたりするので、稲葉さんは一度ポイントを教えると、細かいところにも気づいて、ていねいに洗浄してくれています」

作業の合間に稲葉さんに声をかけて、仕事について聞かせてもらった。

「この作業は力が必要で、しんどいときもあります。量が多いときは少し休みを入れていきます。汚れがないよう気をつけています。工場長さんは、よく話を聞いてくれて、機械の洗浄がきれいに来てきたら褒めてくれるのでうれしいです。がんばって定年まで働きたいと思います」

同じ選別ラインで別の機械の部品洗浄

機械の部品洗浄作業をする  
金山洋介さん



を行っていた金山洋介さん（31歳）は、2009年入社 of 10年選手。金山さんも一人でホースの水を使いながらテキパキと部品の洗浄を行っていた。金山さんは「最初のころはレンコンをザルですくう作業が体力的にたいへんでしたが、いまはいろいろな作業を担当しています」と笑顔で話してくれた。

金山さんは、ほかにも包装ライン（原料のパック詰め工程）の作業全般や、溶液調合の添加物配合など商品製造の要となる業務にもたずさわっている。

「ここでは、みんなが親切にしてくれるので、入社できてよかったです。もつといろいろな仕事ができるようになって、

現場を任せてもらえるようにがんばりたいです」と笑顔で話してくれた。

カット済みのレンコンなどと溶液が一緒に詰められた袋を検品・包装するラインでは、明るく照らされた台の上で数人が手を使って袋を軽くたたいていた。大鋸さんによると、「袋のなかに異物などが混入していた場合、たたくと上側に浮かんでくるので下側からの照明で見えるのです」という。

熱心に検品作業をしていた楠本正二さん（54歳）は入社して7年。障害の程度は重度だそうだが、働き続けるなかで社会性がどんどん身につつき、いまでは後輩の従業員にも作業のアドバイスをするほどに



検品ラインに製品を補充する楠本正二さん

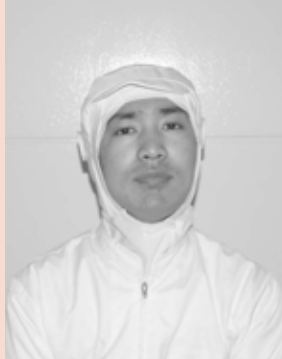
なった。プライベートでは知的障害者ソフトボール競技の徳島県チームに所属し、ピッチャーを任されているという。10月に開催される全国障害者スポーツ大会で、自分が所属しているチームが中国四国ブロックの代表に選ばれるのが目標で、「1回戦も2回戦も勝ちたい」と抱負を語ってくれた。

現場リーダーの枝澤和廣さんは、「障害のある人と一緒に働いていて、これまで特に困ったことはありません」と話す。枝澤

現場リーダーの枝澤和廣さん



楠本さんはソフトボールの選手としても活躍している



資格を取得して、ホイストクレーンを操作する氏家寛敬さん  
(写真提供：株式会社マルハ物産)



さんは2年前にマルハ物産に転職してきたとき、大鋸さんから「少しこだわりの強い従業員さんがいるので、そこだけ気をつけて見守ってほしい」とアドバイスを受けた。日ごろから世間話やちよつとした声かけをするなど、コミュニケーションを心がけているそう。

そして、「任せた作業に一生懸命取り組んだり、効率を考えて工夫しようとしてくれるなど、私よりもエキスパートな熟練さんもいます。今後もみんなが新しいことにチャレンジできるよう協力し合っていたいですね」と話してくれた。

### 技能を身につけ、 職域拡大とポトムアップ

マルハ物産では、今年から新しい取組みとして、障害のある従業員に、業務上の資格取得をうながすことにした。資格とはクレーン技能講習(学科1日・実技1日)と玉掛け技能講習(学科2日・実技1日)の二つ。その挑戦者第1号が氏家寛敬さん(26歳)だ。

「資格取得はハードルが高かったです。が、氏家さんは日ごろの仕事でフットワークや判断能力が優れているので、チャレンジできるのではと声をかけてみたところ、本人も意欲を見せてくれました。この資格があれば工場内のクレーンを操作でき

るようになるので、障害のない従業員と同じ仕事も任せられるようになります」

氏家さんは漢字が苦手なため、学科の予習がスムーズにできるよう、大鋸さんが前もって資格を取得し、内容についてアドバイスしたという。氏家さん自身も、マニュアルの項目などを覚えられるよう「陰でとても努力していたようです」と大鋸さん。取材日はちょうどクレーンの実技講習日で会うことができなかったが、後日、二つの資格を見事取得できたそう

だ。

資格取得をうながすことを検討するきっかけは、全体的な人手不足だと大鋸さんは話す。

「いまいる従業員のなかで、少しでも仕事の幅を広げたいと思いました。障害のある従業員のみなさんには、これまで安全に仕事をしてもらうために役割を制限していた部分があります。例えば、刃物がついた機械を扱う担当にならないようにしていました。しかし経験が積み重なるにしたがって、自ら安全管理ができるところまで成長している人もいます。一緒に働くなかで適性や能力・経験も見極めながらステップアップをうながすことで、本人のモチベーションも上がることがわかりました。資格取得などにより専門的な作業ができるようになった従業員のために、待遇に反映できる新たな制度環境を検討しているところです」

実際にクレーン操作の工程は、90度という熱湯でレンコンをゆでて引き揚げのだが「商品の良し悪しを決めるといってもいいほど、とても重要な部分」だという。氏家さんのような従業員が、クレーン操作を行えるようになることで、それまで担当していた従業員が、さらに別の仕事にかかわることができるよう、工場内全体の人員体制が流動化し、ポトムアップを図ることができる。

氏家さんが資格を取ったことを知って「今度は自分も挑戦したい」と意欲を見ている従業員もいるようだ。

「社内の新しい動きのなかで、彼らの活躍の場や成長の機会を増やしていけたらいいなと思っています。全従業員を含めて配置転換や応援し合える体制もつくっていききたいですね」

### 高齢の障害者が 働ける機会を提供

マルハ物産では2年ほど前から、育成園の施設である指定障害福祉サービス事業所「なごみ」に、職場実習の場として職場共用スペースの清掃業務を委託している。もともと委託していたシルバー人材センターで人員確保がむずかしくなっていたところに、「なごみ」側から「実習でできる仕事がないだろうか」と相談があったのがきっかけだ。

平日午前中に「なごみ」の就労継続支



指定障害福祉サービス事業所「なごみ」でのレンコン皮むき作業  
(写真提供：株式会社マルハ物産)



パン工房「ばんぱかばん」の移動販売車。マルハ物産の従業員にも人気がある  
(写真提供：株式会社マルハ物産)

援B型事業所の利用者が清掃作業を行っている。実習生のなかには当初、音に敏感で感情の起伏が激しい特性を持つ人もいたが、仕事を続けるなかで症状もしだいに落ち着き、「就職したい」という意欲も強くなっているそうだ。

「なごみ」の職業指導員を務める川崎弘法かわさきひろのりさんに話を聞いた。

「清掃作業はハードルが高いので、最初は不安もあったのですが、シルバー人材センターの方や私たちが指導しながら取り組みました。その後、仕事内容が合っていた2人が続けることになり、『ここまでできるようになる』と驚いてい

ます」

同じく2年前からマルハ物産は、「なごみ」に泥つきレンコンを運び入れて、皮むき作業も委託している。きつかけは、70代の足の不自由な男性利用者だった。

「若い人は外に出て作業ができるのですが、高齢の方は体力的にもむずかしい。本人は少しでも働きたいという思いを持っていらつしゃったので、思い切ってマルハ物産さんに相談してみたのです」

初年度は作業をやりたがる人がおらず、この男性を含めて3人ぐらいだったそうだが、実際に作業をしている様子を見て興味を持つ利用者が増え、いまでは

10人ほどにまで増えた。70代の男性は作業リーダーをつとめている。ピーラーを使うので慎重に指導し、できあがりには職員が確認している。扱うレンコンも1日200kg、1カ月3tぐらいになるという。

「最初は『むずかしいかな』と思っていたような人も、どんどん作業能力が上がり、達成感とともに働く意欲もぐんと上がりました。いまでは一定の工賃を支払えるほどになり、本当にありがたいです」

「なごみ」が運営しているパン工房「ばんぱかばん」の移動販売も月1回、マルハ物産の事務所前で行われている。従業員も楽しみにしているようで、毎回売り切れているそうだ。大鋸さんは「直接雇用をこれ以上増やすことはむずかしくても、業務委託などにより、少しでも働く障害者を応援できればと思っています」と話す。

ちなみに大鋸さんは、奥さまが福祉施設で働いており、互いに勉強になることも少なくないそうだ。最後に大鋸さんは、障害者雇用をすすめる地域社会のあり方についても話してくれた。

「私が、この松茂町がよいと思っている点は、長年にわたって小・中学生が授業の一環として知的障害者施設を訪問していることです。子どものうちから、障害のある人を身近な存在として当たり前のよう感じられるような経験と機会を、社会でたくさんつくっていくことも大事ななと思います」